



「希望の大切さ」

第二次世界大戦中、アウシュビッツ強制収容所から奇跡的な生還を果たしたユダヤ人のヴィクトール・フランクルの言葉から希望についてご紹介します。

精神科医だったフランクルは、冷静な視点で収容所での出来事を記録するとともに、過酷な環境の中、囚人たちが何に絶望したか、何に希望を見い出したかを克明に記しました。

収容所では様々な「選抜」が行われました。ガス室に送られるか、あるいはどの収容所に移されるかは、ちょっとした偶然で決まりました。先が見えない中、収容所ではクリスマスに解放されるとのうわさが広まりました。しかしそれが裏切られると、急に力つきてしまう人が多かったのです。自暴自棄になり、食料と交換できる貴重な煙草を吸いつくしてしまう者もいました。過酷な環境の中で、フランクルは考えます。心の支え、つまり生きる目的を持つことが、生き残る唯一の道であると。フランクルは、収容所での出来事を通して、「生きる意味」を学び取ろうと決め、人間の心理について冷静な分析を行います。そしてついに解放され、奇跡的な生還を果たしました。

私たちは、自由で自己実現が約束されている環境こそが幸せだと思っています。しかし災害や病気などに見舞われた時、その希望は潰えます。収容所はその最悪のケースです。しかしそれでも、幸せはまだ近くにあるのではないかとフランクルは考えました。人間は欲望だけではなく、家族愛や仕事への献身など、様々な使命感を持って生きています。どんな状況でも、今を大事にして自分の本分を尽くし、人の役にたつこと。そこに生きがいを見いだすことが大事なのではないかとフランクルは考えました。そして医師としてチフス患者の病棟で働きながら、仲間たちに希望の持ち方を語りました。

参考文献

「夜と霧」ヴィクトール・フランクル著

NHK 100 分名著

希望を持つこと、夢を持つことが、生きていく上で必要であるとフランクルは語っています。子どもたちにも、私たち大人にとっても言えるのではないのでしょうか。子どもたちは、「看護師になりたい」「プロ野球選手になりたい」「サ

サッカー選手になりたい」と、職業を夢見る子どももいるでしょう。中学校に行ったら、あのクラブに入りたいと近い将来に希望を持つ子どももいるでしょう。クリスマスになったら欲しいものが手に入るとワクワクする子どももいるでしょう。この夢や希望こそが、つらい日々を乗り越える糧になるのではないのでしょうか。

「志を持とう」

- 1 野球選手になって、お金持ちになりたい
 - 2 野球選手になって、応援してくれる人たちに勇気と元気を与えたい
-
- 1 サッカー選手になって海外で活躍し、目立ちたい。
 - 2 サッカー選手になって、こんな自分でも、がんばったら活躍できるんだと子どもたちに夢を与えたい。

1は、自己中心的で、社会性はありません。単なる夢や希望だと思っています。しかし、2は社会とのつながりを持とうとし、社会貢献を果たそうとする姿勢です。志を持っていると思っています。夢や希望の中でも、社会貢献度の高いものを、「志」と考えています。1をめざすなら、人を押しのけて栄光を勝ち取らなければなりません。2をめざすなら、1番になることは、そう意味のあるものではないと言えます。

幕末の志士と呼ばれた人たちは、世の中をなんとかしたいと、社会貢献の精神を貫いていました。だから「志」という言葉をつけたのではないのでしょうか。

子どもたちには、夢や希望を持ってほしい。その中でも、志を持ってほしいのです。だから、今「人の役に立ちたい」という精神を身につけさせたいのです。

感謝の会

11/30(水)に日頃お世話になっている地域の方々を招いて、感謝を捧げました。最初に全校合唱を聞いていただいた後、1・2年生が、地域の方々を喜ばせようと、ゲーム屋台、肩たたき、ジャンケン列車を企画し楽しんでいただきました。参加された方は、笑顔いっぱい「楽しかった～」と、口々に喜んでおられました。これこそ、「人の役に立った、喜んでもらえてよかった」と社会貢献の精神に触れたのではないのでしょうか。

